

375号線の出来事

－感謝の気持ちを大切に作る心－

- 1 学年 第8学年〔後期〕
- 2 主題名 感謝の心〔2－（6）〕
- 3 ねらい
男の子の行動から生じた私の気持ちの変化を通して、感謝の心が人々の関係に潤いをもたらすことに
気付き、日々の生活の中で、その心を素直に表現していこうとする実践意欲を育てる。
- 4 資料名 「375号線の出来事」
- 5 展開

	学習活動と主な発問	生徒の反応	指導上の留意点
導 入	1 自分の中にある感謝の心を振り返る。 ○ 最近、あなたはどんなことに感謝しましたか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友だちに勉強を教えてもらったこと。 ・ 毎日、お弁当を作ってもらっていること。 ・ 毎日、元気に過ごしていること。 	○ 日常生活の中にはいろいろな感謝の心があることに気付かせる。
展 開	2 資料を読んで、「私」の思いについて考える。 ○ 「私」はどのような思いから車を止めたのでしょうか。 ○ 男の子の行為に対して、どうして「私」は驚き慌てたのでしょうか。 3 感謝の心について自分自身を振り返り、考えを深める。 ◎ 「自分の周りにある善意に対して鈍感になっていたのではないか」という「私」の考えをどう思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特別な思いはなかった。 ・ 歩行者が待っているから止まってあげよう。 ・ 対向車が止まろうとしているから自分も止まろう。 ・ 男の子が自分に対して頭を下げてくれるとは思っていなかったから。 ・ 今までにこういう経験をしたことがなかったから。 ・ 男の子が自分の行為を善意として受け止め感謝してくれていたから。 ・ 善意を「これくらい当たり前だ」と思っていたかもしれない。 ・ 感謝していても、その気持ちを表せていなかったと思う。 ・ 自分に向けられた善意にきちんと気付ける人になりたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 男の子に対して特別な思いがあったわけではないことをおさえる。 ○ 男の子の感謝の気持ちが素直に表れた行為であることをおさえるとともに「私」の思いにも共感させる。 ○ 善意や感謝とはどういうものかについて話し合い、互いの考えを深める。
終 末	3 「心のノート」(P.64～65)を読み、自分自身を見つめる。 ○ あなたにはどんな「ありがとう」がありますか。「心のノート」に書いてみましょう。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 両親が共働きなので、いつも祖母が母親代わりで世話をしてくれる。いつもおいしいごはんをありがとう。 	○ 周りの人々の善意にどんな形で応えていきたいかについて考えさせたい。

6 授業の概要

(1) 主題について

私たちの生活は、多くの人々の善意によって支えられている。しかし、その善意を当たり前と捉えてしまうことや、善意に気付いてはいても感謝の気持ちを素直に表現することができないこともある。

また、近年、人間関係に悩みをもつ生徒が多いことから、潤いのある人間関係を築く上で欠かすことのできない感謝の心についてじっくり考えてみる必要がある。

指導に当たっては、人は互いに助け合って生きていることを自覚し、日々、自分に向けられた善意に自分自身が気付いているか等について振り返らせるとともに、相手の善意への応え方にはいろいろあることを考えさせたい。そして、自分の心の中にある感謝の気持ちを素直に表現することが、自己と他者の心の絆を強くするものであることを捉えさせたい。

(2) 自作資料活用のポイント

ア 資料活用の時期

特に時期は問わない。年度初めの交通安全指導等と関連させて扱うのもよい。

イ 資料の中心場面と考えさせたい内容

「私」に向かって男の子が頭を下げて感謝の意を表した場面が中心場面ではあるが、資料の流れに沿って感謝について考えるだけでは、十分な深まりが期待できにくい。ここでは、男の子の行為から「私」の中に湧き上がる様々な思いに注目し、「自分に向けられた善意に気付かずに過ごしてしまっていることはないだろうか。」と感じている「私」の思いを生徒たちに投げかけ、感謝について考えを深めるきっかけとしたい。

(3) 指導過程の工夫

ア 導入の工夫

自由に発言させ、生活の様々な場面に感謝の心があり、自分たちが自覚している感謝の内容について確認させたい。

イ 中心発問における学習活動の工夫

男の子の行為に驚きを感じている「私」の姿やそのときの「私」の思いから、生徒自身の感謝についての思いを引き出すようにしたい。また、多様な意見に触れながら、自分自身の感謝に対する思いや考えを深めさせたい。

ウ 補助発問の工夫

展開後段において話し合いを深め、自分の周りにも多くの人々の善意があることに気づき、感謝の心がもたらす潤いのある人間関係に気付いていけるよう、次のような補助発問を工夫したい。

「自分の中にも『これくらいは当たり前だ』と思っていることはないだろうか。」

「自分が同じ場面に立ったとき、どのような行動をとるだろうか。」

「最後の場面の車を走らせている私は、どのようなことを考えているだろうか。」

エ 「心のノート」の活用

ねらいにせまるために「心のノート」を活用したい。P. 64～65を読み、自分の周りにある人々の善意について振り返らせるとともに、その善意にどのような形で応えていきたいかを考えさせたい。